
幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

蝶乃 みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

【Zコード】

Z0047BA

【作者名】

蝶乃 みなと

【あらすじ】

幼馴染の美紀と真志、美紀は至って普通の女の子だけど真志はかなりの顔の良さ。（皆はこれをイケメンという）美紀が真志と付き合つことを夢みて色々と頑張るお話です。でも高校生活には色々ハードルや試練があるので応援してあげてください（・・・）

幼馴染の彼と高校で回りクリスになれるのかヤキモキの件（前書き）

新感覚な感じで書いてみました（・・・・）＝
良かったら読んでみてください

幼馴染の彼と高校で同じクラスになれるのかドキドキの件

「 美紀つてさ、なんで太っちゃった訳? 」

中学校最後（卒業式）の下校の時に
幼馴染の持田真志が爆弾発言。

え、てゆうかレディーに向かつてそんなこと言う人いるの?
この世に存在することすら知らなかつたわ!
てゆうか太つてないし! 結構これでも瘦せてるほうだし!
てゆうかデリカシーない男だな!

まあその後私はダイエットで3キロちょい痩せた。

私、原田美紀は真志とは幼稚園の頃からの幼馴染で
小さい頃から顔が良かつた真志（はつきり言えばイケメン君）
に群がる女を駆除するのが
昔から私の仕事だった。

私たちは高校一年生になった。
真志と私は当たり前みたいに同じ高校に入った。
そこらへんが幼馴染の特権。
いつになつても離れないこと。

高校生と言えば恋の発掘現場、恋を発掘しまくられる場所とい
う訳で。

もちろん顔が良い真志は女子生徒の注目の的という訳
真志は空気も読めなければデリカシーもないという男だけど

そのせつぱりした性格が女の子にはツボらしく、真志のスマイルに何人の女がオチていくのを見てきた。

私が真志に群がる女を駆除してきた理由は他でもない。
私が！真志に！惚れているからである。
あわよくば真志と付き合いたい。
私の容姿だと幼馴染という設定がなければ近づくことも触れる」とさえ

一生叶わない夢だったと思う。

そこには神様と産んでくれたお母様に感謝するが、どうせ神様なら

私と真志をくつづけて下さい、死んだら私が次の神様になつてあげるから！

そろそろ高校生になつた私たちの話をします。
高校で一番大事なものは『クラス発表』！
んでね、高校のクラスは4クラスまであつたわけ。
私が真志と同じクラスになれる確率は低くもないし高くもないといふ
微妙な確率。

ドキドキしながら見ていると、真志が叫ぶ。

「あ、俺1・4だわ」

1・4！？

私は急いで1・4のクラス名簿を見た。
私の名前は原田だから真志より前のはず。
目を凝らして見てみると、原田、原田……あつた！

私の田の中には紛れもない『原田』の文字が！
ヤツタ～もう神様ありがとハジヤーこます、一生ハジのハジ恩は忘
れません。

「真志、私も同じクラス」

「おつ 美紀のクラス見つけ、1-1-じやん」

・・・・・はい？

あのあのあのあのあのすみません

さつき私のクラスが1-1-1だと言いましたか？

私は1-1のクラス名簿を見る。
ん！？私の原田美紀といつ名前が。

じゃあ1-4にいた原田は・・・んん！？

原田・・・やとみ？

同じ苗字の原田さん。

見ず知らずのあなたを呪います。

くつそ、じつにう間にでも真志を狙つてる女子がじるつていう
のに。

周りを見渡せば真志を見てキャッキャッ騒ぐ女子たちの群れ。
真志はい今までに付き合つた女子はいない。

（私の駆除のおかげなのか真志が付き合つ『氣がないだけなのか
わかんないけど）

ああもうなんで同じクラスじゃないの！

神様とかもう信じない絶対信じないああああああああもう嫌

「クラス離れちやつたなーでもまあ昼休みに会いに行くから

「う・・・うん

真志いいいいい（泣）

高校生活・・・クラス離れちやつたし今まで以上に警戒しな
ければ。

女子高生は怖い、きっと怖い、肉食系、絶対野獣、絶対ハイ

エナ。

入学初日で友達ができるかできないかの件

仕方なく真志と別れた私は未知の領域となる高校生の教室へ

GO

真志も居ないし

鬱鬱鬱鬱鬱

おっとダメだぞ

昼休みには真志が来てくれる！
それまでに何とかしないと。

とりあえず教室で同族を見つけられれば最高なんだけど。
これから一年一人で過ごごとなきやいけなくなるとか嫌だし！
私は少ししかない勇気を振り絞って教室のドアを開けた。

イタ
！-！-！

清純派女子、ビバ純粹女子！

窓際で本を読む超美人なあの子はきっとハイエナなんかじゃないし

男漁りとか合コンとか不純異性なんぢゃらとかいふのとは無関係な領域に

凛とたたずむ純粹でマトモ、真面目女子！

私は自分の席を確認する。

えっと・・・あつたあつた、窓際！

あの清純派女子の後ろだ！

今さらだけど最高にツッてる（^_^）！

これならなんとなく仲良くなれるハズ。

私は清純派女子の後ろの席に座ると後ろから肩を叩く。
どんな声でどんな優しい心の持ち主なんだろう！

「何か？」

「えつと、後ろの席の原田美紀。よろしくね」

「私は小島紗羽、じゅりやんよろしくね」

キタキタキタキタキタ

！――！

この反応は優しくて清潔で純粋な子の反応である。

「よかつたら話さない？」

「いじよ」

「どこの出身なの？」

「私、ハラ中の」

「ハラ中つて小原中！？結構遠いところから来たんだね」

「うん、原田さんは？」

「あ、原田さんじやなくて美紀でいいよ」

「あ、ほんと？じやあ美紀つて呼ばせてもらおうかな。
私の事も紗羽でいいよ」

「じゃあ紗羽つて呼ばせてもらうね。」

「私はすぐその新中だよ～」

「そつなんだー、あ、もしよかつたらアド交換しない？」

「あ、するするー。」

「これすごく良い展開じゃないー？」

さつく新しい友達出来たしこれで一年間は絶対安心。

あの心配は真志だけ。

真志と付き合えれば青春真っ盛り！て感じで良かつたのに。

「美紀は彼氏とかいるの？」

「 ヴツ・・まあこの話題は逃れられないか

「私は・・・まあ好きな人はいるけど」

「へえ！誰？同じ高校？」

「ん・・・んまあね」

「へー頑張つてね」

あ、あんま追求してこない？

それはそれで有難い。

無駄に追求してくる人つているよねー

私はそういうの無理派だし。

入学初日に出来た友達は良い人だった。
いまのところそれだけが救い。

幼馴染の彼を猛獸の群れから奪えるか奪えないかの件

私に友達ができたのはいいけど
他の人は仲よくもなれそうもない人達ばかり。

おもつきりケバイ化粧、茶髪金髪あたりまえ
一年生なのに制服は着崩してるしスカート丈短つ
耳やら口やら鼻やらに未知の穴・・・

ゼツツタイ仲良くなれない
てゆうか話すことさえ無理無理無理無理無理

んで、昼休み。

「美紀！」

この声は真志！
教室のドア付近で一コニコ笑いながら手を振る真志発見
やつと愛しの真志が来てくれたあああ

だけど一瞬にして真志は女子の群れによつて消えていった。

くつそう邪魔な女どもめ！

真志は私だけのモノ！

・

「真志のところへ向かおつとすると紗羽の顔。

「あれ、誰？」

「あ、ああ、あれは1・4の持田真志。
小さい頃から顔が良くてモテてたの」

「へーかつこいいね、ちょっと話して」よつかな

えつ！？ちよ紗羽！？

やばいやばい紗羽とライバル？になつつけられとか無理！

「でも真志つて女の子と話したりしないから・・・

「？呼び捨て？」

「あ、ああ・・・真志と私は幼馴染な」

「へーす」いね、イケメンくんと幼馴染なんだ」

「そういうのも小さい頃から一緒にだから、すじことかよく分
かんないんだ」

「そつなんだ」

「ちよつと呼ばれてるから行くね」

真志の顔が良い為に！

私の友達の紗羽まで真志の虜になつちゃうかもしれないな

んて！

なんて運が悪いの私よ・・・

「真志！？」

「あ、美紀」

群がる女をかき分けて真志と無事会つ。

「ちよつとアンタ誰よ？真志君の」と呼び捨てなんて何様！

？」

近くにいた超美女が叫ぶ。
私のことですか！？

「美紀、いじりばせ」

真志が私の手を握つて廊下へ脱出。
てゆうか、手、握つちやつた、よ。
超美女は私たち一人を見て悔しそうに叫んでいた。
ざまあみそらしご！

結局勝つのは一番真志に近い人間、つまり幼馴染の私！

「大丈夫？」

「あ、うん。真志こそ」

「俺は大丈夫だけど」

「てゆうか・・・その、ありがとね。助けてもらつちやつて
「いや会いに行くつて言つたの俺だし。

どう？クラスは

「友達出来たよ、ばつちり」

「マジで！まあ美紀は良い奴だもんな」

この時間がもつと長く続けばいいのに。

なんでクラス離れちゃつたんだろ、神様。

どうして私と真志の仲を引き裂くとするの？

「ね、えねえ真志、帰りひま？」

「おう」

「一緒に帰れない？」

「何言ってんだよ、俺らずっと一緒に帰つてたじょん

心臓がうるさい、

真志は私の事をただの幼馴染として見てる。

だけど私は・・・・

期待しちゃうよ、そんな言葉言われたひ。

「ねえ、私たちっても・・・・」

「ん?」

「・・・いや、なんでもない」

言つたら壊れる、絶対に。

私と真志だけをつなぐ幼馴染の絆といつもこの糸が。

幼馴染に恋してる普通少女がハブられるかハブられないかの件

昼休みが終わると私と真志は別れて自分の教室へ戻った。
そこで問題は私。

教室のドアを開けると田の前に厚化粧女子数人。

「原田美紀だよな？あんた真志君の何なの？」

「・・・へ？」

「へ？じゃねえええええんだよおおおお」

ひいいいいいいいいいいいいいい泣

この人たち完全に私を殺そうとしてる！

相手を冷静に数えると5人。

つまり5：1で彼女らは私を殺そうとしているに違いない！

「私と真志は、ただの・・幼馴染ですからして」

「幼馴染？」

「小さい頃から遊んでいた仲という意味でして」

「それは分かってんだよおおおおおおおおお」

キヤ　　怖い怖い！

「てことは真志君とお前はただのトモダチってわけな
「え・・・ええまあそうなります」

「それはそれで良かったわ。もしもお前が彼女ですか言つたら
まじ半殺しにしてたから（笑）」

「だが、真志君にもつ近づかないでくれる？」

（笑）！？
（笑）つてなに！？

「だが、真志君にもつ近づかないでくれる？」

・・・！？

「私たちとか中学の頃から真志君に憧れてたの。
真志君はみんなのモノ、それが守れない奴は排除しなきゃい
けなくなるからあ」

「排除・・つまりハブつてことね。

初日から運ないなあ、こんな奴らと同じクラスになるなんて。

「オイ、何とか言えよ」

絶対嫌。殴られてもハブされても真志だけには、
真志だけは私とずっと仲の良い幼馴染でいてほしい。

「守れない」

「あ？」

「そんな約束出来ない守れない無理絶対不可能！

そもそも真志はみんなのモノつて言つけど、つから真志はみんなのモノに

なつたのよー？真志は真志だしそんな勝手なルールなんか守

れない！

いつから真志はモノになつたのよー！？」

言つてやつた。言つてやつた。

同時に後悔。後悔後悔後悔後悔後悔・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ぜつたいハブ、ぜつたいイジメ、ぜつたい転校させられるる
ゐる

「何せつてんの？」

「しつ真志君

真志？

厚化粧女たちが叫ぶ。

私が後ろを振り返ると真志。

「俺が誰のものだつて？」

「真志君、これは違」

「何が違うんだよ？俺はお前らのもんになつたつもりはねえ
なるつもりもねえ、分かつたら美紀には一度と近づくんじや

ねえぞ」

「いひじめ、・・・・・なさいー！」

厚化粧女は真志の横を走つてすり抜けて出て行つた。

真志の顔、怖い、なあ
本氣で怒ってくれてるの？

ねえ真志、どうして私にそんな優しくしてくれるの？
守ってくれるの？真志は、私の事どう思つてるの？

「また何かやられたら言えよ、すぐ助けるから」

「うん」

「俺これ届けに来ただけなんだけど」

「あ、私のピン」

「これないと前髪とめられねえんだわ」

「ごめんごめん」

「美紀つてほんと世話を焼けるよな、気をつけろよ」

真志はピンを私に渡すと手を振つて出て行つた。
ピン、忘れてたか。

幼馴染の彼が噂を耳にしたのか聞きたいけど聞けない件（前書き）

この話はすこしく短くなってしまいました汗
次回からは春をすつ飛んで夏編になります笑
ストーリーがグングン進んでいきそろそろ終わりますw
良かったら最後までよろしくお願いします

幼馴染の彼が噂を心うれしく思つてゐるのか聞きたいけど聞けない件

あのあとは特に何事もないまま終わった。
でもあの大騒ぎ（どいちかつつーと小騒ぎだけど）は
クラスの目の前でやつたのでクラスメイトはもちろん
ほかのクラスメイトも見ていたので噂話がうるさくなってしまった。

特に、真志ファンに。

帰りのHR^{ホームルーム}が終わると真志が迎えに来ていた。

「待つてくれたの？」
「もちろん」

一人で学校内を歩くと色々な噂が流れているようすで全部耳
に入ってきた。

私と真志が付き合つてるとか（それはそれで私にはありが
たい）が主だけど。

真志、どう思つてゐるんだる、この噂。

そんなこと、死んでも聞けないけどね笑

幼馴染の彼が噂を耳にしたのか聞きたいけど聞けない件（後書き）

前書きでも書きましたが、次回からは春をすつ飛んで
夏編へと突入します*
しかも夏休みがすぐ来るので驚かないでね（

幼馴染の彼をお祭りで説かれるかの件（前書き）

前回で言つたとおり夏休み直前のお話です。

夏の学校風景はほとんどかかれないまま夏休みに持つてかれます笑

幼馴染の彼をお祭りで誘えるかの件

あつい、あつい、あついぞ田本！

夏つて本当憂鬱だよねw
プールに飛び込みたいわあ

突然ですが夏と言えば、そうー。
お祭り・花火大会と言った大イベント（・・・）
乙女にとっての恋の戦争時代
つまり私にとっても戦争時代だということなのですぬ

今度こそ（？）真志と一緒にマードになりたい（

そつそと夏休みに入つてほしいのに。

夏だからなの？

夏だからこんなに時が過ぎるのが遅いのおおおおお？

かつん。

イタ…い？

田をぱちりと開けると田の前で辞書をもつた国語の先生
が怒つてらつしやるわ。

あ、チョーク投げつけられたわけね

（願望）

てゆうか前々から疑問だつたんだけどチョーク投げるのはいいの？

ルール違反じやないの？頭にぶつかんなかつたら絶対危険だもん

コントロールがない先生がチョーク投げたら絶対顔面に当たるよね？

「原田、どうしたボーッとして？」

「う…え？」

ズシツ

「いっ…たああああああ

「田が覚めただろ？」

国語の先生は笑つていつた。

これは、体罰だ。

辞書を人の頭にぶつけるといつ名の体罰だ。

「教科書は人の頭を叩くためにあるものじゃなくて

人の頭を良くするためにあるんですけど…」

「おつ上手い事言うね笑」

「…んのクソ野郎…！」

心を入れ替えて授業を受けようにもなかなか頭に入らない。たぶん耳には入つてゐる。うん、耳には入つてゐるんだけどね、なかなか脳内には入らないんだなーこれが

私はシャープペンで机に夏休みまでの日にちを書いた。

あと2日…この微妙な感じが嫌だわあ
早く夏休みになんねえかなー

「美紀つたら怒られてたねー笑
辞書痛くなかった?」

紗羽が二コ二コしながら言つ。

「めっちゃ痛いよ泣
「そろそろ夏休みだねー」

めっちゃ話ズレた!

「確かにね
夏休みつていつたらイベント盛りだくさんだよね
「お祭りとか?
「うんうん好きな人誘つて二きりで…キャ…なん
てね笑
「すきな…人ねえ…」
「うんうん」
「美紀は好きな人いるんでしょ?誘うの?
「う…誘うだけ誘つてみるかなー
もしかしたらほかの人と約束してるかもだし
「そつか…じゃあ私もそうしようかな
「え?どうゆうこと?」
「私も気になる人いるんだあ笑
「まーじーでー!」
「教えないけどね笑」

「お互ひ頑張らつね」

真志とお祭り… 考えただけでも素敵…
絶対素敵な夜になるし…

今日の帰りでも聞いてみようかな…。

「さりーつ れい さよーならー」

「のあこせつ誰もやつてねえんだからやる必要ねえだろ
てゆうか私日直だあ

日誌書いてさつたと終わらせりやつおーつと

「ふひ」

終わった終わった終わったー
さて真志と帰ろうつと
教室のドア付近にたまつてゐる男子軍団を切り抜けて人ごみ
の廊下に出ると

ありや？真志が居ないや

真志のクラスのほうが遅いのかな？

真志のクラスに行ってみると誰も居ないし
あれれ？どこ行ったんだらつ…

真志を探して下駄箱まで来てしまった汗
帰っちゃうよー

つて何か近くで聞こえる?この声...紗羽?
あ、そういうえばこここの下駄箱つて下駄箱の隣の小窓から、
裏がすぐ裏庭だから裏庭の声が下駄箱から声ダダ漏れなん
だよねー

裏庭で告白とかしてもみんなにまるきこえだから可哀想な
んだよね~

『ねえ一緒にお祭り行つてくれない?』

...!紗羽がお祭り行かない?つて...てことは一緒にいる
人が紗羽の好きな人?

裏庭につながっている窓があるとは言え、めっちゃ小さい
から顔を覗くことは出来ない

『ごめん、俺、君のことよく知らないし、それに
もしかしたら一緒に行く人がいるかもしねないから
『それって、どういうこと?』
『まだ約束はしていないってことだよ
そーゆうことだから、じゃあね』

やばつ、来ちゃう汗

急いで下駄箱から逃げて階段を上つてからまた下がった。
上から来たふりして、何も知りませんよ~アピールしながら

らも

紗羽の好きな人バツチリ目撃してやる!
てゆうか紗羽も紗羽で教えてくれればいいのにー

そしたら応援するのにさ！

てゆうかさつきの男の声なんか聞いたことあるんだよねー
上手く聞き取れなかつたからよく分かんなかつたけど

んで、冷静を保つて階段を下りるとバツタリ紗羽と対面。

「あれ？紗羽ちゃん、どうしたの？もひ帰るん？」

「あ、うんー、そうなの」

「そつか、じゃあねー」

「バイバイ」

あれ？紗羽ひとり？

おかしいなーどうしてだり…

「紗羽？」

ん、この声…って

「真志？」

「紗羽がー、「メン」「メン」ちょっと用があつて」

「あ、ここにいたの？」

「おー、ちょっと鞄とつけてくるわ」

真志が階段を上つていぐのを見て確信した。

紗羽、真志に、惚れたな？

紗羽が呼び出したのは真志。

気になる人つていうのが真志ならお祭りに誘うのも分かる
紗羽は私が真志の事を好きつて知らないんだから好きにな
つちやうのも

しょうがない事だ、未然に防げなかつた私が悪いのだ。

てゆうか、えー…

まさかの唯一の友達がライバルになんの？
もう神様つてほんとイジワルだよね笑

もうじつそ清々しく笑うしかないのだ。

階段を下りる足音が聞こえて、真志が現れた。

「じゃ、かえろつか」

「うん」

そういえば、お祭り…
さつき真志、一緒に行く人がいるかもしれないって言つてた
けど

誰の事だろ？ 友達？ まさか好きな人？

「ねえ美紀」

「ん？」

「祭り、誰と行くん？」

「あ…あう、あ」

なんかいざとなつたら言いにくい！

これで断られたらなんか恥ずかしいし汗汗汗

「もしも約束してないんだつたら俺と行こうよ

「え」

「うん？」

「いいの？」

「なにが」

「えつと、その、一緒に…お祭り行つても」

「だから誘つてんだけど笑」

「そ、か」

なんかすごく恥ずかしい、顔、赤くないかな…

「じゃあ、行きたい」

「じゃ決まりな、てゆうか浴衣着てこいよー浴衣
「浴衣あ？無理無理、着方すらわかなーいし
てゆうか浴衣つて私に似合つ服（？）じゃないから笑
「そつかなー俺ぜつてえ似合つと思つんだけどー」

真志が笑う

そんなこと言われたら…
そんなこと言われたら浴衣着るしかないじゃないか！

「んじや、じゃあな」

「ばいばい」

家に帰つて速攻お母さんに叫んだ。

「浴衣出しねー」

幼馴染の彼をお祭りで誘えるかの件（後書き）

次回は早速夏休みに入ってしまうと思こます（＼＼＼＼＼）

浴衣が着れるようになるのかならないのかの件

うあああああああああああああああああああああ
いきなり叫んでしまって申し訳ありません
実はお母たまに浴衣を出してもらつたのだけれど
『着方が分かんないwww』
お母さんに聞いてもわかんないとか言われるし
いちいち着物屋さん的なところに行つてやるのもなんか嫌
だし

じゃあ着るなって話だけじゃ。
前回の話を見た方は分かると思いますが
幼馴染の真志にお祭りに誘われてしまったのです！
(詳しくは前回を見てね　ミ　ばちこーん)

これは重大だよね、つーか緊急事態なんだよね！
お祭りまでに浴衣を一人で着れるようにならないと
真志とのお祭りの日に浴衣着ていけないからさあ泣

で、待ちに待つた一日後＝夏休みに入る日

放課後に体育館で夏休みにむけての課題？注意？とかを
校長先生がしゃべつてます。

校長先生つて話長いよね笑

まったく耳に入つてないからね

今はもう真志との妄想vvvしか頭にないも

ん

いつの間にか話が終わつていて、みんなが帰つていく。

私も帰ろう、帰ろう！

いつもどつり真志と帰ろうとする……んだけどまた真志が居ないのだ。

また！？

真志らしき背中を発見…んんんんんんんんんん？

隣に…紗、羽…

そういうえば紗羽つてば真志の事好きになっちゃつてるんだ

よね…

しょうがないしょうがない、ネガティブになるな、私よ！

とりあえず追跡。

ついていくと、またあの裏庭に。
なので下駄箱で盗聴(？)を開始

『ねえ、お祭り本当にだめ？』

『うん、もう約束しちゃつたから』

『その約束しちゃつた人つて…誰？好きな人？』

『それ言つたらどうすんの？』

『別にどうもしないけど、とりあえず知つておこうかなつて。
そしたら私も諦めるし、メールも、もうしないから』

…メール！？

嘘でしょ？紗羽と真志がメアド交換してたなんて。
そんなのいい関係になつてたの？
でも昨日は真志が紗羽のこと『あんまり知らない』って
言つてたから…紗羽がただアピールしてるだけってことだ
よね

『で、誰なの？好きな人なんですよ？』

『…』

『まさか、美紀とか？』

『なんで美紀のこと』

『あ、図星？美紀とはお友達なの。

美紀とは幼馴染なんですよ？てことは美紀と行くんだ？
美紀のこと、好きなの？』

『そんなんじゃないよ、だつて幼馴染だぜ

ただの友達だろ、勘違いすんなよ』

『へえ～、てことは私はあきらめないからね』

『…好きにすれば』

…

そ んな ん じや な い ？

勘 違 い すん な ？

好 き に す れ ば ？

頭が真っ白になつて何も考えられないみたいに、
みんなの声のざわざわとかも聞こえないくらいに、
それぐらい真志の言葉にショックを受けてる。

…なんで私こんなにショック受けてるの？
わかつてたはぢゃん、真志は私の事好きじやないって。
どうせ私の思いは一方通行だつて。

…ぜつたい、かなわない…恋だつて…

それから後のことのはんまり覚えていない。
気づいたら家に帰つてベッドにダイブしていた。
たぶん真志とは一緒に帰つてないんだと思う。

私があんなにショックを受けたのは、
わかつてたはづなのにあんなに悲しくなつたのは、
私の考えじやなくて、真志の考えを聞いたから。

私はぶつちやけ真志の友達以上恋人未満、どつちかつてと
恋人寄りの方だと思っていたからなのだが。
でも真志は違つた。

友達以上恋人未満で例えたなら、真志は私の事を
友達寄りの方だということだ。

私と紗羽だつたら、紗羽の方が恋人よりだということだ。

私が特別な人だと思っていた人は、ただのお友達だつたと
いふこと。

お祭りに誘われたから、浴衣似合つて言われたから。

それは友達として誘つただけ。言つただけ。

勘違いしていたのは、私だけだつたようです

鞄の中でメール受信の点滅をする携帯に気づかないまま

夏休み、突入です

浴衣が着れるようになるのかならないのかの件（後書き）

夏休み突入直前までしか進めませんでした（・・・・）
次回からは完全夏休み生活となります（^ ^）ノ

ちなみに私の方はお休みが終了してしまったので
更新ペースが亀になりますがよろしくお願いします

夏休み初日の朝はお母さんの声で起きました。

「美紀、お母さんのお友達に浴衣着せられる人が居るんだけどどうする？美紀浴衣着たいんでしょ？」

私は布団に包まつたまま言つた。

「あああ～…浴衣ね…もついいの、浴衣は」

「はあ？どうしたのよ前は着たい着たいってうるさかったのに

「うるさくて申し訳ありませんでしたね！」

真志とのお祭りは驚くほど行く気になれなかつた。
好きな人といふ時間こそ、至福のときだと言つた偉人は誰だつて。

てゆうかむしろ、真志には今会いたくない。

「あつそう、じゃあまた着たくなつたら言つてあげるから
「そんな日一生絶対永遠に来ないから安心してください」

お母さんは笑つて出て行つた。

たつた前までは、浴衣が着たくてしょうがなくて

真志とお祭り行きたくてしうがなかつたのー。

私は布団から出ると携帯を探しまくる。

あれ？ どつかやつちやつたつけか？

あ、そうだ、昨日鞄にいたままだつたんだ。

鞄から携帯を取り出すと点滅ランプが目に入る。
点滅？ 誰からメールか電話だ。

携帯を開くと受信メールが5件来ていた。

FROM 真志

どこに居るんだよ
今俺体育館前

FROM 真志

おーい
先帰つちやつよ？

もしかして先
帰つちやつた？

FROM 真志

FROM 真志

返事来ないから
わかんないけど
先帰っちゃつてる
つぽいので俺も
帰るわ

FROM 真志

今家着いたけど
今美紀家?
置いてつてたら
ほんとゴメン
そういうえば
祭りのことだけど
時間とか決まつたら
メールして

ごめんね、真志
このメールに返事、出来ない。

今はもうお祭りなんて来なればいいと思つてゐる。
ごめんなさい、真志。

あつといつまに夏休みは過ぎてく。
んで、祭りの日も近づいていく。
気づけばあと三日後だつた。
そろそろメールの返事をしなきやいけない。

私を責めたてるかのよつに真志からメールが届く。

祭り、何時にする

FROM 真志

真志つて本当に文章短いんだよなあ
なんて、返せばいいんだるつ。

FROM 美紀

遅れてごめんね汗
時間は午後の6時で

いいかな？

これでいいかな…（・・・・・）
送った後、数分後に返信がきた。

FROM 真志

了解

もう戻れないいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

断つちゃえれば良かつたのに！

私よ…なにを考えているんだ（・；・；・）

このままだつたら、真志とお祭りいくはめになつちやづぜええええええ汗汗

なんか考えなきゃ（・・・・・）

のじり、一日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0047ba/>

幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

2012年1月10日18時49分発行